

福島原発事故から2年余。事故は未だに収束せず、放射能汚染の不安は解消されていません。放射線や被ばくの問題を次世代を担う子どもたちにどう伝えるのかは、教育関係者、父母にとどまらず、国民的な課題です。

文科省は、福島原発事故後にそれまでの原発の副読本を改定し、あらたに小学生用、中学生用、高校生用の3種類の「放射線副読本」を全国の学校に配付しています。当会常任世話人の増田善信氏(理学博士)は、放射線や被ばく問題の正しい知識を身につけ「恐れて怖がらず」が大切だと指摘しています。中学生用・副読本を中心にその内容を見てみました。写真1小学生用の副読本



### 原発事故にはほとんどふれない副読本

原発事故を受けて新たに配付した今回の副読本からは、「原発の安全性」の強調は消えましたが、原発事故は前書きでわずかにふれただけです。

#### 中学生用副読本

(福島原発事故で)放射性物質(ヨウ素、セシウムなど)が大気中や海中に放出されました。この発電所周辺地域では、放射線を受ける量が一定の水準を超える恐れがある方々が避難することとなり、東日本の一部の地域では、水道水の摂取や一部の食品の摂取・出荷が制限されました。

### 報道や各界見解から

◇河北新報(2012・9・14)

「世界史に刻まれた東電福島原発事故。それほどの出来事なのに、本文では触れられていない」

◇毎日新聞(2011・10・15)

「従来の副読本にあった原発の安全性を強調する記述は消えたが、福島第1原発事故への言及は前書きだけ」

◇福島大学放射線副読本研究会

「新副読本は、福島第1原子力発電所の事故後に作成されたものですが、事故に関する記述はほとんどな(り)」

副読本第1の柱は「不思議な放射線の世界」  
放射線は身の回りのどこにも存在と強調

中学生用副読本の第1の柱は「不思議な放射線の世界」。中身は「植物からの放射線を写し出す」として「スイセンから出ている放射線」を写真付で紹介し、その利用例として「水などの動きの研究に利用されている中性子線」「エックス(X線)」「CT画像」などに利用されていることを紹介。

#### 中学生用副読本

ココがポイント

放射線は、そのままでは目で見ることができませんが、私たちの回りのどこにも存在し、また、身近な色々な分野で利用されています。

## 子どもたちに放射線・被ばく問題をどう伝えるのか

### 福島原発事故後に発行された文科省の「放射線副読本」をみる

中学生用副読本の第2の柱は「太古の昔から自然界に存在する放射線」。自然界に存在する放射線。放射線は「宇宙から」「大地から」「空気から」「食べ物から」、放射線を受けていると説明しています。

副読本第2は「放射線は太古の昔から自然界に存在」「人類は放射線が存在する中で進化」と説明

トを左記のように述べています。

#### 中学生用副読本

ココがポイント

人類は放射線が存在する中で生まれ進化してきました。私たちは、日常生活でも放射線を受けています。

**報道や各界見解から**  
 ◇福島大学放射線副読本研究会

「人工放射線は身近にありません。自然の放射線は身近にありますが、人工の放射性物質による放射線管理区域が設定されています。」

「人工放射線は身近にありません。自然の放射線は身近にありますが、人工の放射性物質による放射線管理区域が設定されています。」

**文科省副読本第3〜第5の柱**

**原子や放射線、測定器などを解説**

中学生副読本の第3の柱「第5の柱は、「放射線とは」、「放射線の基礎知識」一色々な放射線測定器」などについて説明されています。

**文科省副読本「放射線による影響」**

**「普通の生活でもガンになる」の説明も**

中学生副読本の第6の柱は「放射線の影響」。この部分では「外部被ばく」「内部被ばく」の説明や「自然界から受ける放射線量」「体内、植物中の自然放射性物質」などがイラスト入りで紹介されています。

自然界から受ける放射線量の世界平均の量と日

線による影響では左記のような記述も見られます。しています。

**中学生用副読本**

一度に多量の放射線を受けると人体に影響が出ますが、短い期間に100ミリシーベルト(SmV)以下の低い放射線量を受けることでがんなどの病気になるかどうかについては明確な証拠はみられません。普通の生活を営んでいてもがんは色々な原因で起こると考えられていて、低い放射線量を受けた場合に放射線が原因でがんになる人が増えるかどうかは明確ではありません。……

「300人はさまざまな要因でがんを発症する『避けられない死者』。後段の5人はもともと死ななくてもよい人たち。一緒に論じられない。『5人はがん死することを受容せよ』と断言するようになるもの」と批判する。「そもそもICRPの試算自体が甘いという学説もあり、両論併記の姿勢が必要ではないか」

**中学校教師用説明書から**

これは放射線以外の原因で生涯、30割の人が亡くなっており、蓄積で100ミリシーベルトの放射線をうけてもがんで亡くなるのはわずか0.5割増えるだけだと言いたいのでしょうか。

**学習のポイント**

◎ガンなどの病気は、色々な生活習慣が原因で起こる可能性があることを学ぶ。

**指導上の留意点**

◎100ミリシーベルト以下の低い放射線量と病気の関係については、明確な証拠がないことを理解できるようにする。

◎ガンの発生には、色々な原因があることを理解出来るようにする

**報道・見解から**  
 九州大・長山淳哉教授(環境分子疫学)

「300人はさまざまな要因でがんを発症する『避けられない死者』。後段の5人はもともと死ななくてもよい人たち。一緒に論じられない。『5人はがん死することを受容せよ』と断言するようになるもの」と批判する。「そもそもICRPの試算自体が甘いという学説もあり、両論併記の姿勢が必要ではないか」

**省の放射線副読本**

一読してウソは感じないけど、ごまかしだらけ。文部省の放射線副読本

「100ミリシーベルト以下に年間一〇〇ミリシーベルトを超えない量では健康被害はまずない」と言っている。健康被害はまずないという「影響」はあるが、人の死は出てこない。この無

視には意図がある。その先に「再稼働は可」という論を掲げている。……

この副読本の「作成委員会」はどんな顔ぶれなのか。……監修として、独立行政法人・放射線医学総合研究所、社団法人日本放射線安全管理学会、日本放射線安全学会、日本放射線影響学会が並ぶ。委員長を務める大学の名誉教授は文科省が設置した「放射線量等分布マップの作成等に係る検討会」のメンバー。……

**委員には事故後、「多大な人員と費用をかけて**

(一般人の被ばく線量を)一年一ミリシーベルト以下にすることは無駄な努力」と述べたり、新聞の取材に「年間一〇〇ミリシーベルトを超えない量では健康被害はまずない」と言っている。健康被害はまずないという「影響」はあるが、人の死は出てこない。この無

**2011・11・2**

「影響」はあるが、人の死は出てこない。この無

**2011・11・2**

「影響」はあるが、人の死は出てこない。この無

